

## 仏凡一体の妙境

「寄せては返す生死大海の大波小波  
船なき者は怒涛狂乱恐るべし

仏なき者は煩惱を恐れよ

地獄も餓鬼も畜生も煩惱より生る

されど仏を得たる者よ

生死を恐るなかれ

煩惱を怖るなかれ

苦悩を避けることなかれ

親鸞聖人は自ら進んで

肉食妻帯の煩惱底に沈んで

そこにおどる法蔵の本願を信樂した

煩惱を怖れるものは小乗なり

煩惱のみに無自覚なるものは凡夫なり

仏心に生きて生死煩惱に『なりきる』

これを大乘菩薩道という

仏凡一体の妙境 南無阿弥陀仏！」

## 生死大海

我らは今、人間として大地の上に生をうけて来ました。すでに生れて来た以上は嫌がおうでも生きなければなりません。生きなければならぬと力んで見ても、やがて死が訪れてきて、どこへか去かなくてはならない。そこで生死の問題がおきてくる。

涯しなく広がる大海の浜に立つて大海原を見渡す時、様々な思いにひたります。「なき」と「しけ」が限りなく続く。人生に似たものは大海であります。もし大海に波が起こるからとて、あの波を起さないようにしようとする人があります、それが出来ると思っている人があるならば、世にもあきれた馬鹿者であります。もし人生に波が少しも起さない日が来ると考えたり、又波を起さないようにしようとする思想があれば、その思想こそ真に危険思想であります。その思想がもつと大きな波を起すからであります。

そこで、我らに与えられた正しい態度は、波をおこすまいとすることではなくて、波の起きてやまぬ人生を「正しく認識する」ということであります。親鸞聖人は和讃に  
おいて

「生死の苦海ほとりなし ひさしく沈めるわれらをば

と断定されました。 弥陀弘誓のふねのみぞ のせて必ずわたしける。」

「生死の苦海ほとりなし」、この短い一句を抹殺する如何なる思想も、方法も、発見することは出来ません。正しい大地の実相の認識であります。

「寄せては返す生死大海の大波小波！」

私は人生を凝現して、かく言わざるを得なかつたのであります。

まず怖るべし

世にもし、船に乗ることなくして、大海を泳いで渡ろうとするものがありとすれば、その無謀笑うべし、無智哀れむべきものであります。もしまた、人が溺れているのを見て、船なくして、とうてい泳ぎきることの出来ないほどの大波の中に飛びこむ者がありとすれば、その意気やまことに感心すべく、その挙動たるや、愚というべきであります。

しかも船なくして大海にひたり、まさに押し寄せんとする大荒おおしけをも知らず、なんらの恐れをも感じないでいるとすれば、呑気さにもほどがあります。

「船なきものは怒涛狂乱おそるべし。」

小さい船に乗っている漁師たちさえ、いざ荒おおしけが来そうだとなれば、急いで網を上げて帰つて来ます。

大海を渡すものは船であります、生死大海を渡る船とはいったい何であろう。釈尊も一度は徹底的にこの大海におそれた。龍樹も、天親も、曇鸞も、道綽も、善導も、源信も、法然も、そして我が親鸞聖人も、一度は、必ずこの大海を凝視して驚き怖れた。そうだ、この煩惱の波の起きてやまぬ大海の中に、死地に活路を見出すべく恐れられた。怖れた、徹底的におそれた。おそれたが故に、一切を捨てての求道精進があつたのだ。助かる道はないか！ 救われる法はないか！

ああ。

「仏なきものは、煩惱を恐れよ。」

地獄をおそれるといふか、

餓鬼道、畜生道を、おそれるといふのか、

「地獄も、餓鬼も、畜生も煩惱より生る。」

一切の問題は、ただ煩惱より生れる。

恐れても恐るべきは煩惱である。煩惱の業火、三千大千世界を大焦熱地獄とし、無間大地獄とする。「三界の虚妄はただ一心」より生れる。されば、まず一切を突き飛ばして、人生を考え、人生を悩み、人生を悲しみ、疑い、怖れ、真の大解決を求めよ。かくの如くせずして生れた一人の聖賢をも地上に見出すことは出来ない。

いつしかに、釈尊の出家入山も、法然上人の悲嘆も、親鸞聖人の御苦勞も、一つの物語りになりました。寺に生れたが故に学校にゆき、卒業すれば説教する。家が真宗

だから寺に参る。大した煩悶もなければ疑いもない。本気になって考えた日もない。そのうちに日が暮れて、いゝ加減にお茶を濁してこの世を去る人のみ多いことである。

だが、苦しんだ人の心は苦しんだ人のみが知り、悩んで得た者の道は悩んだ人のみにわかります。

仏道はただ

仏道はただ己を真に愛する人のみが知り得るのであります。自分の生きていることを、二束三文に買っている人、自己を尊ぶことを知らない人には、絶対に知ることの出来ない道であります。

「俺も大学でも卒業するか、高等官か大金持にでもなれば、自分を大切にしようが、なにぶん学校は小学校だけ、それにこんな田舎の水呑百姓、何がいったい尊いだ。」という考えがあなたに起きる。しかし、その考えこそ釈尊が根本から嫌われた思想です。

釈尊が尊いのは皇子だからではない。財と位があつたからではない。三時殿の中で暗い顔していられたのが釈尊であり、やがて一切を捨て、沙門行乞の底に、人格の絶対価値、天上天下唯我独尊を自覚されたのが釈尊であります。

ですから、釈尊のお弟子は、誰でも皆、尊者舍利弗、尊者大目犍連だいもくけんれんと呼ばれます。ただにそうした賢い人のみならず、その時代、インドの下層階級にあつて世に卑しめられていた人たちでも、一度お弟子になれば、優婆塞尊者うぱさいであり、尼提尊者にだいであつて、王族、婆羅門ばらもんの名門の子弟と平等でありました。中には、自分の名字さえ忘れると言われた愚かな周利槃得しゅうりはんとくさえ、尊者でありました。

人間の尊重は皮から外の何ものによつても定まるのではない。皮から外にある様々な物によつて、だまされて、自分自身を忘れた生活こそ、恐るべき墮落であります。

自己自身の絶対尊重、そこから真剣なる人生生活が生れます。我が光明団では、かかる何ものをも持ち込んで、威張ること、存在を主張することを許されません。ただ、自己絶対尊重の自覚、南無阿弥陀仏のみを持つて来り、集まり、溶けて、団結一体の精進のみが許されます。

話を本筋につれかえります。かくの如く自己を尊重する者が、自己自身の生活について厳粛に考えはじめます。そして、そこに発見するものが、生死大海に沈める我であり、煩惱のみに狂う自己であります。

されど

「やれど仏を得たるものよ

生死を恐るなかれ

煩惱を怖るなかれ

苦悩をさけること勿なかれ。」

大波のうつ大海があるが故に、幾万トンの大船が生れ、生死の大海があればこそ、弥陀弘誓の大船が成就されるのであります。南無阿弥陀仏こそは、実に「難度海を度する大船」であります。

釈尊も、ついにこの大船に乗托し、龍樹天親の二大聖も、やがて、我が聖人もこの大船に乗托して、「慶哉」の凱歌をあげられました。

それは決して凡小のはからいによつて生れる船ではなかつた。聖なる久遠の法身より、自然無作の大神によつて、顕現し、廻向し、成就する、それ自体独立する、金剛不壊の大信大行の船でありました。はからいの尽きるところ、自力の消滅するところ、疑いの雲霧の晴れるところ、我が現前脚下に横たわる、この絶対にして広大なる乗物、弘誓の船は、煩惱の荷物を満載して、彼岸に向つて真一文字に走っているのであります。

天行、健なり、我これによつて起ち

大行、真なり、我これによつて生く。

生死 恐ることなかれ

煩惱 怖ることなかれ

苦悩 避くことなかれ

私が如来を探ねるに先だつて、

如来こそ、我を見出し、

私が如来を引き寄せようとするに先だつて

如来こそ、我に来たり

私が如来に生きようとするに先だつて

如来こそ、我に生きたものであります。

生死界は浄土の光の輝くところ

煩惱は如来正覚の華の開くところ

苦悩は如来大悲の生きる舞台

されば我らは、死を怖れつゝ、死をおそれず、煩惱を持ちつつ、煩惱を超え、苦悩を背負ひつつ、かえつて人生の意味を発見するのであります。

### 聖人の信境

はじめ仏教は一切人の救われてゆく道でありました。ところが、それがいつしかに、すぐれたもの、智者、善人、聖者のみの悟る道となつてしまいました。日本においても、高野や叡山は女人禁制の道場であり、捨家棄欲の出家のみの集る聖道門でありました。しかもそれすらいつしかに廃れて、僧とは名のみで、官位や紫衣金襴の衣

の色にのみ心を奪われ、山法師となつて京洛を荒すと云つたお話にならぬありさまになりました。そこには、必ずや、もつと純真な、そして力強いものが芽生えて、如来の生命を輝かせねばなりません。この使命を担つて生れたものが念仏門易行道の興起でありました。

新しいもののもつ使命は常に同一であります。すなわち、失われたる生命を取りもどすことと、その生命の火を大衆の上に移して、一切衆生と共に生きようとすることとであります。この使命をおびて生れたものは、必ず腐つた既成教団から迫害されます。しかもその血を見るような間に、新しいものはいよいよ純真さを發揮し、腐れたものはいよいよ醜状を曝露しつつ、ついには新しい正しいものの勝利となります。吉水の教団が迫害の中におかれたのは、やむをえないことでもあります。

しかし、吉水教団の人々には、人生や自己を忠実に見返そうとする真面目さがあります。三宝に対する真実の帰依があります。俗的な官位よりも、もつと清浄真実なる如来こそ尊ばれます。如来よりも大法よりも、人間が勝手につくつた制度が重ぜられ、教義は人間の煩惱に都合がいいように曲げられ、法は生活の中に生きて来なくると形骸のみが残つて来ます。吉水の教団は、この形骸がもつ俗なる力によつてもろくも散らされました。しかし散つて各地に念仏の種を下しました。

親鸞聖人は、似而非聖者の住む山を下りて、吉水の禅室に一切をなげ出して念仏道に救われ、本当の人間の道を歩まれました。聖人はすでに、九歳の春、道について無自覚なる俗の世界を出でられた。しかも、二十九歳、僧の天地から足を洗われた。そこに、俗に非ず僧に非ざる、第三の天地が開かれました。非僧非俗の愚禿の世界がそれでありました。

人間について考えることのない俗にとどまることは出来ない。しかし俗よりもあさましい装われた偽善の天地に自己を欺くことも出来ない。非僧とは、自己凝視に徹底し、必墮無間を諦観せる者の世界であり、非俗とは、南無阿弥陀仏の大生命に更生せる、いわゆる俗ならぬ天地であります。愚禿とは愚なるもの、禿とは無戒名字の比丘、名ばかりで戒を保つことなき悪人のこと、愚禿の名字こそ、一番おちつける世界でありました。聖人は一切を捨てて、やがて、念仏のみに蘇られたのであります。

### 悪人成仏の信

我らは今、謹んで聖人の信境に合掌する時、聖人は自ら愚禿と名のり、「地獄は一定すみかぞかし」と告白し、あくまで底なき煩惱を自覚せられてあるが故に、自ら「聖者なり」と言う者よりも、もつと聖なるものをその中に拝まざるを得ない。人格の尊嚴はまことにこの天地にのみ見出し得ることの証あかしであります。

我らは、聖人のみ教えによらねば、何時までも、廃悪修善や、心持の一时的転変や、せせこましい自己改造や、つまらぬはからいや、さらに美しい偽善の甲胃よろぎや、そうした、いかげんな世界に流転していて、久遠の大生命たる如来を見失い、自己を見失つて、この世を終わるところでありました。

人格の尊嚴は、人間の本質的な喜びは、如来をぬきにしてはあり得ない。しかも如来は、高原の陸地にも、山の中にも、伽藍の中にも、象牙の塔の中にも、おられはし

ない。生きた人生、生きた人間、寒風荒ぶ荒野にこそ、法蔵の本願力となって、廻向顕現したもうてあるのであります。

煩惱即菩提は大乗の通説でありつつ、煩惱を突き止めることを忘れて悟りをたづねたり、煩惱をおそれて道を成就しようとしたり、そうしたまちがいが念仏道によって正されました。

「他力というは如来の本願力なり。」如来の本願力！ 本願力！ 本願力の中のみに宗教がある。救いがある。生活がある。光がある。歓びがある。聖人は一切を超えて、この本願力に生きられたのだ、乗托されたのだ、立上られたのだ。この絶対無限の如来金剛の願力が、衆生の全体となるのだ。

しかも、如来の本願力は、ただ煩惱の内にはたらくかけ、見出されるのだ。必墮無間底に徹底せずして、如何でかこの如来本願力に値うことが出来ようぞ。

まことに如来の願意は、清浄なるもの、煩惱ならぬものにおいて起されるのではない。法界を汚して生死海を出現する無明煩惱こそ、如来の願心を發揮せしめる根拠である。されば、「善人なおもつて往生すべし。いかにいわんや悪人をや」。内観自照の天地において、はつきりと三毒煩惱の相にふればふれるほど、そこに、如来大悲の廻向成就する大信は明らかに信樂せられる。

「親鸞聖人は、自ら進んで

肉食妻帯の煩惱底に沈んで、

そこにおどる法蔵の本願を信樂した。」

見よ。一切衆生は、肉食により、妻帯によつて、生を営んでいるではないか。しかも、肉食妻帯せる者は、如来の大悲にも漏れ、救いからも拒まれていると信じている。如来の智慧光に生き、大悲の真髓に徹せる聖人は、自ら進んで衆生の相に同じて肉食妻帯を敢行し、念仏の聖火を在家止住の生きた人生に移された。

法蔵の本願は生きた人生生活におどる！

ああ、十悪五逆の煩惱の諦観、すでに菩薩大士にのみ可能であります。凡夫はかえつて、眼を外に向けて、自らの清浄真実を主張します。すでに眼を外に向けている、そこには自己もいなければ如来もない。

如来に生きる者こそ、十悪五逆を深信して、無漸無愧、散乱麓動、一生造悪を自照します。何で自らを「菩薩なり」といい得ましょう。しかし、自ら「菩薩なり」と言うが故に菩薩ではない。自らは極重悪人と深信する者、菩薩たることを拒まれはしない。我らは一転して聖人の自証を聞こう。

権威

聖人、本典証卷に言く、

「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即時に、大乘正定聚之数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。」と。

大乘！ 正定聚（必ず仏になる絶対の候補者）の数に入る！

煩惱成就によるが故に正定聚の菩薩ではない。しかも煩惱成就の凡夫なるが故に菩薩位を拒まれるのではない。ただ、如来の大信、大行によるが故に、菩薩は誕生するのでありました。煩惱底に法蔵の本願力がおどるが故にのみ成立する菩薩道であった。千古の疑團はここに氷解し、明刀実（あきら）に乱麻を断つて、真如の明光、はじめ輝き渡つたのであります。

されば聖人は、仏凡一体なる人格の權威を主張して言く、「信心を獲たる人は、必ず正定聚の位に住するが故に、等正覚の位と申すなり。」（末燈抄）

等正覚とは、五十一段、菩薩の最高位である。また言く、

「しかれば、弥勒に同じ位なれば正定聚の人は『如来に等し』とも申すなり。浄土の真実信心の人はこの身こそ、あさましき不浄造悪の身なれども、心はずでに如来と等しければ、如来に等しと申すこともあるべしと知らせたまへ。」と。

かかるお言葉は、至るところに拝見することが出来ますが、人生の尊嚴は、はつきりと樹立てられたのであります。人間生活の意義は、明確に断定せられたのであります。人格の本質は鮮かに開顯されたのであります。

如来は、人生の真つただ中にはたらき、煩惱を聖化して、煩惱の衆生を念仏の菩薩たらしめ、如来の眷族たらしめたものであります。人生こそは、如来の生きたもう舞台であり、衆生こそは、如来の心に生きて、如来浄土の莊嚴に参加して、仏国土建設の使命に生かされるのであります。

されば、生死の園、煩惱の林たる人生は、諸仏菩薩、往相、還相、入出自在無碍なる、園林遊戯地であります。人生の妙味、生きることの喜びは完全に示されたのであります。

「如来浄華の衆は、正覚の華より化生す。」（天親論主）

如来浄華の衆とは、信心の行者のこと、等正覚の菩薩は、如来正覚の華より化生（うま）れて「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海のうち皆兄弟なり。」（曇鸞）との人生生活の基調は発見せられた。

## 信の内容

憶うに、聖人の信には二つの特質があります。

その一つは罪惡生死の凡夫の深信懺悔であります。

その二は大乗正定聚の徹底の高調であります。

およそ過去の聖賢にして、その自内証の世界において、罪惡生死の凡夫といい、極重惡人といい、十惡の法然坊と叫ぶなど、古今軌を一にして同証はありますが、しかし、聖人ほど善惡の対立を超えて大惡に至り、賢愚を超えて大愚に至り、大愚大惡の煩惱底に徹した方はありません。しかも一面、真実証を顯して「謹んで真実証を顯わさば利他円満之妙位、無上涅槃之極果なり」と信一念の中に、無上大涅槃の仏果の証を確信された方もありません。されば思いきって正定聚を現実に肯定して、先の御文の如く、自ら住する位を等正覚と言ひ、「如来と等し」とまで絶唱されたのであります。

しかも、等正覚に住するからとて、必定無間の煩惱が無くなったのではなく、一生造悪の自内証が、等正覚を拒みもしない。ここに両極は念仏の中に一如に融合して不可思議の信樂を体解するのであります。一生造悪、無功德なるが故に、憍慢に陥らず、正定聚なるが故に自卑絶望することなく、念仏の大行は、あくまで煩惱を否定して転悪成善しつつ、罪悪生死を内省せしめ、無有出離之縁の深信はいよいよ自力をはなれて、純に如来に帰命せしめるのであります。もし、愚禿の信知と、等正覚の自証と、この二者、その一を欠けば、信は正信でなくて迷信となり、空想となり、邪路に陥るのであります。

## 二つの迷路

二つの迷路とは何か、二乗地と地獄とであります。二乗とは小乗のことであります。龍樹は、小乗と地獄とが菩薩の陥る迷路であることを厳しく誡め、特に二乗に陥ることは菩薩の死であるから、甚だ怖るべきであることを教誡されました。

小乗の人は、自らの小さき独断にたてこもり、浅はかな知にふみとどまつて、我悟れりとなし、一切群生と共に救われようとする願を持たぬものであります。彼は煩惱を畏れます。煩惱を怖れるのあまり、煩惱を無くしようとし、又、時に煩惱なし、我善人なり、智者なりと、高くとまります。私どもはかかる人を多く見受けることが出来ず。彼は小さい城を造つて、それに立てこもり、独りその城を守ることに汲々としています。二乗の人は利己的であります。自分だけ幸福であればいい人でありません。

8

ですから彼は、人生から隠遁して世の俗塵に交わず、静の中に静をたづねます。彼が固い独断の中に立てこもる限り、独覚（縁覚）であり、彼が小我を棄て得ず、一生大信なくして、道を求める限り、声に囚われ、言葉のみ聞く声聞であります。

独覚は、十悪五逆の諦観を忘れて、煩惱なしとうぬぼれ、声聞は、煩惱を怖れて、これを捨てようとはからいます。

地獄を造つて地獄を知らず、道とも法とも思わず、煩惱のみに囚われて無自覚なるものが正真正銘の凡夫であります。しかも、凡夫は決して凡夫であることを知りません。彼はただ苦悩のみを問題として、それから逃れようとのみあせつています。

## 念仏道

この二乗と、地獄との二つから救われてゆく道が大乗であります。念仏道は大乗の至極、一切衆生をことごとく載せて彼岸にわたす大乘菩薩道であります。

「煩惱を怖れるものは小乗なり

煩惱のみに無自覚なるものは凡夫なり

仏心に生きて生死煩惱になりきる

これを大乘菩薩道という。」



念仏の人は、如来の大願力に救われて、仏心に生きる人であります。仏の功德をすべて廻向された人であります。

「よく本願力を信樂する人は、すみやかに疾く功德の大宝海を信者のその身に満足せしむるなり。如来の功德の際なく広く大きなことを大海の水の満ちみてるが如しとたとへたてまつれるなり。」(銘文)

涅槃の徳の全現した南無阿彌陀仏の大成を身に満足に獲た人であります。

更に本願力に救われた人は、信心の智慧を頂いた人であります。

「智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし。」

如来の大慈悲はやがて、永劫の盲であつた凡夫に、智慧の眼を開いて下さるのであります。されば「たとえ一文不知の屁入道なりといふとも、後世を知るを智者とすといえり。」であります。この信心の智慧こそ、如来を信知する眼であり、内に悪業煩惱を發見する眼であり、人生を正しく認識し道を見つめる眼であります。

更に念仏の人は、如来金剛の本願力に生きた人であります。ですから眞の力の人であります。何ものにも焼けも溶けもしない金剛の信に心を樹て、必然の力に押し出されて生きます。そこに「無碍の大道」が開きます。

ですから彼は、どんな苦悩が押し寄せても、苦悩から逃げようとしません。合掌の中に一切の苦悩を受け取つて、よく忍終不悔の生活を成就します。自然の道理によつて柔和忍辱の生活が成就されるのであります。

それは一面、智慧によつて正しく苦の原因をつきとめて、苦の因は罪業にあること9を知るが故に、因果の鉄則を無視せず、「汝を苦しめる者は汝である」ことを知るが故であります。

彼はまた恩を知ります。されば聖人は和讃に、正しい念仏生活を提示して、

「弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり。」

と言われ、また

「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし。」

とも讃嘆せられました。

以上、念仏行者の特質を、

一、念仏行者は如来の功德を獲得する、

二、信心の智慧の開かれたるもの、

三、金剛不壞の信力、

四、忍従の人、

五、報恩の生活者、

と五つを挙げました。

その他にもなお多々あることではありますが、こうした徳を持てる生活は、そこに、「仏心に生きて生死煩惱になりきる。」という生き方をなさせしめられるのであります。

## 超越と随順

「仏心に生きて生死煩惱になりきる。」とは、超越と随順の一体を語ったものであります。

念仏の行者は機の深信において煩惱を見出します。ですから「煩惱のみに無自覚である」ことは出来ません。しかも、如来の本願はこの煩惱あるが故に生れたものであることを聞信し、やがて、生死煩惱こそは蓮の咲く泥であり、大根のできる畑である、念仏の不行は高原の陸地には生ぜず、この生死煩惱の中にのみ咲く浄華であることを知るが故に、煩惱を懺悔こそすれ、これを捨てようとはしません。

また、我われとは煩惱に目口のついたものであつて、我われが煩惱を持つているとは思いませんから、煩惱を無くしたり、捨てたりしようとはせず、また、自分だけは煩惱はないものであるなどと考えて、独覚のごとく高くとまろうとはしません。あくまで煩惱を諦観しつつ、しかもこれを捨てようとしませんから、彼は煩惱になりきるのです。煩惱こそ如来の御宿であり、信心の聖火の燃える炭であります。煩惱様々であります。彼は常に煩惱底に落在して、そこにおどる願力に生きます。煩惱をぬきにしては仏はないのであります。

さらに、彼は苦を苦しみますが、しかし忍の道を行じ、恩徳報謝の無我の生活態度をとり、智慧によつて正しい生き方を知るが故に、苦しみから逃げようとしなくて、あくまで苦悩の中に自己をささげきります。苦悩は彼を亡さずして、かえつて彼を鍛えて生活を成就する善知識となります。苦悩はこれに随順したがうもののみが超越こえるのであります。

彼は「たとひ念仏して地獄におちたりとも」さらに後悔いたしません。浄土か地獄か、苦か楽か、あげてこれを願力にまかせて、よく人生および我われに随うが故に、生死界に居いつつも常に浄土に居るのであります。

彼は今や、人生と我とが一体であり、生死煩惱と我とが一体であり、一切衆生と我とが一体であり、宇宙と我とが一体であり、国家と我とが一体であり、すべてと一体であつて、苦しいからとて逃げもせず、訴えもせず、善を行じたからとて代償をもらおうともせず、悪を見ても疑いもせず、任運無作、自然法爾の生活を樂しむのであります。

## 仏凡一体

かくて我らはずいに行住座臥、出る息も入る息も、如来と一体なる、仏凡一体の妙境に至るのであります。共に今一度、讃歌を高誦いたしましょう。

「寄せては返す生死大海の大波小波

船なき者は怒涛狂乱恐るべし

仏なき者は煩惱を恐れよ

地獄も餓鬼も畜生も煩惱より生る

されど仏を得たる者よ

生死を恐るなかれ  
煩惱を怖るなかれ  
苦悩を避けることなかれ  
親鸞聖人は自ら進んで  
肉食妻帯の煩惱底に沈んで  
そこにおどる法蔵の本願を信樂した  
煩惱を怖れるものは小乗なり  
煩惱のみに無自覚なるものは凡夫なり  
仏心に生きて生死煩惱に『なりきる』  
これを大乘菩薩道という  
仏凡一体の妙境 南無阿弥陀仏！」